

紀南の100人

63

ふたば保護者会会長 出口幸三郎さん(53)

ダウン症の次女がはまゆ
う支援学校高等部に入学し
たとき、将来の進路を考え
た。

成長が遅く、日ごろは小
学生のような振る舞いのわ
が子。3年後には就労させ
なければならぬことに不
安と疑問を感じていた。



田辺市明洋1丁目在住。保険代理店経営。ふたば保護者会会長、フォレスクール支援会会長

遠い都会に一人で送り出すことはできない。同じ思いを持つ親がたくさんいることを知り「地元で専攻科をつくらう」と呼び掛けた。

2006年9月、育友会が発起人になって「紀南養護専攻科を考える会」が発足。会長として県教委と話し合ったが「趣旨は理解できているが、予算がないので不可能」という回答しか得られなかった。

「学ぶ作業所」を全国に

とか「和歌山方式」と呼ばれている。

「子どもを教育する場が実現できれば、教育施策でも福祉の事業でも構わない」と発想を切り替え、福祉施策を活用して学ぶ場をつくることを次の目標にした。

この提案に、作業所の移転を計画していたふたば福祉会が協力してくれた。障害者自立支援法の施行も追い風になった。しかし、資金が足りない。考える会の会員と一緒に必死で募金活動をし、半年で1千万円を集めた。

田辺市芳養町の小高い丘の上に「たなかの杜・フォレスクール」が開所したのは08年4月。初年度は8人が入所した。毎年6〜8人の入所者があり、ことしは最多の11人を新入生として迎えた。

カリキュラムで重視して「これらはすべて、「たなかの杜」にちなんで「フォレスクール方式」とか「和歌山方式」だが、これで目標が達成されたわけではない。現在の教育や福祉行政は「まだ、障害のある子や親の気持ちとかけ離れている」と痛感している。

名刺の肩書は相変わらず「紀南養護専攻科を考える会会長」。全国に「学ぶ作業所」を広げるとともに、教育の場である専攻科を地元で設立するのが次の目標だ。

(長)